

# 末黒野

すぐろの

3月号 (通巻787号)



# 百合鷗

小川玉泉

齊唱の心経寒き膝頭  
三門を音なく包み夕時雨  
舌先に糶のとろけ蕪鮓  
手機織る音に足留め冬日和

生きて遭ふ皆既月食霜の声  
蘆原を燃やしつくすか冬落暉  
やうやくに葉を落とし切る桜かな  
屋根裏に風棲む気配ちやんちやんこ  
足す塩の灯にきらめきぬ蕪汁  
州を発つは長の合図か百合鷗  
ゆりかもめ導水橋をひとり占め  
初日待つ潮に浄めし手を温め

枯

れ

松本三千夫

苔生ふる走り根太し笹子鳴く  
鳥居百狐百体石露の花  
小町通り一つ逸れたる寒さかな  
短日の引く波にある力かな  
凧に耳ばかり鋭くゐたりけり  
枯れきつて芒の揺れのぎこちなし  
枯萩を起せば影の生まれけり  
一輪車止めて拾ふ子冬椿  
一人聴く深夜放送灯火冴え  
半額のワゴンセールや街師走  
再会を約す握手や息白く  
寒月や神杉の秀の不揃ひに

# 甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）

## 年用意

小野口正江

白陀師の泣いて語りし波郷師忌  
波郷師忌来るや白陀師重ねて  
三島忌やあの日のテレビまざまざと  
三の酉なれば詣でし夫あらず  
次の曾孫は男子と分かり冬満月  
夫逝きてより用殖えぬ年用意  
かまぼこの飾り切りして節料理  
早々にごまめの手配雪催  
煤払などは気にせぬひとりにて  
入院を思ひとどまり冬至風呂

## 隠れ蓑

清海信子

神官の突つ掛け下駄や神の留守  
寝不足の目にピラカンサ赤すぎて  
後先に小春の道の影法師  
幸せの数向ひ家の干蒲団  
枯葉てふ手応への無き軽さ掃く  
葱畑と言ふほどもなき葱に雨  
尼寺のことに彩濃き冬すみれ  
寝乱ることなく風の浮寝鳥  
落葉して隠れも出来ぬ隠れ蓑  
着膨れて手足短かくなりにつけり



# 乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）  
太字は推薦句

枯 蓮 鈴木 一三

小 春

西川 みほ

椋鳥の群れ組み易し散り易し  
人と言ふ支へに生きて新走り  
今生の彩を尽して櫨紅葉  
点滴の妻に付添ひ初しぐれ  
笹鳴や一枚岩の橋渡る  
**小春日や廊下の艶は妻の功**  
枯蓮の百態さらす池面かな

絡まるる蔦と紅葉づる神樹かな  
**菊人形見得切る武士の脛細き**  
山の辺や幟ひとつの在祭  
谷戸鴉騒ぐを余所に山眠る  
水かけて句碑の文字読む小春かな  
鼯肩力士の名前言ひ合ひ日向ぼこ  
五山一位の靈気身に入み時頼忌



寒 さ 松田 泰子

冬 菊

森清 信子

残照のさめゆく速さ浮寝鳥  
新しき畳の上の寒さかな  
**風呂の栓抜くや寒さの渦巻きに**  
いつせいに葱の高さを渡る風  
たそがれの海をふちどる寒さかな  
枯園のさらに枯れゆく音のあり  
笹鳴や気付かぬほどの昼の月

今朝の冬 森清 堯

走り根の荒肌見せて今朝の冬  
**冬菊のすがる日差のよそよし**  
追憶は海に沈めぬ風花す  
坑を抜け冬のもみぢのV字谷  
杉の香の古道の湿り夕笹子  
奥社への手摺りなき磴雪蛩  
甲斐駒へ続く稜線冬茜

山茶花 吉田きみえ

**油送貨車の鋭き停止音今朝の冬**  
雲早し心字池へと散紅葉  
山上湖の空統ぶるかに鷹一羽  
官道の工事たけなは山眠る  
白鳥の一棹去りぬ夕茜  
日溜りに早にぎやかや冬木の芽  
冬菊のこの上のなき日差かな

女坂生垣の萩風まかせ  
近道を抜け木の実降る社かな  
百段の一步や冬の鷓猛る  
山茶花の散り敷き庭の照りかげり  
散り紅葉溪の深さの水の音  
**小春日や盲導犬の車中まで**  
白菜の三つ四つ残り屋敷畑

# 青炎集

## 小川玉泉選



横浜 岡野里子

横浜 嵐 弥生

香ばしき匂ひの中を西の市  
酉の市巫女に見知りの整体師  
看板の商一字実南天

低く来て日向をたどる冬の蝶

崎めぐる風引き寄せて千大根

紺碧の小春の湾の出船かな

横浜 鍋島武彦

中天の月耿耿と今朝の冬

東京駅の丸屋根覗く小春空

警官立ち寒き東電本社前

一片の雲もなき空神の旅

冬の日の映ゆる葦壁一葉忌

冬夕焼送電線の煩ささよ

見霽かす海の蒼さや紅葉晴  
薄日差す森の細道花八つ手  
落葉踏む音のしみ入る静寂かな

ひとり来て落葉時雨に出合ひけり

病む姉に障子明りの柔らかし

着膨れてうからの集ふ湯宿かな

横浜 河合とき

亡き母の夢見し朝冬椿

色付きてより知る袖子の数多かな

初雪や列車動かぬ陸奥の駅

湯の町の夕べの鐘や風花す

白湯うまし霜夜の町を帰り来て

引き継ぎし夫の十年日記果つ

横浜 戸田澄子

ポインセチア夫の形見の文机に

納骨の夫と別れる寒さかな

着ぶくれてころころと坂下る

喪中はがき書きし背より隙間風

年の瀬や俳縁つなぐ手紙書く

余生なほ更なる幸と日記買ふ

横浜 小田嶋野笛

一人鍋の葱の甘さや夫の留守

看り来て嵩を踏み縮む落葉道

寒禽の影飛んでゆく荒れ畑

白足袋の裏の真白く干されけり

水源はほんにささやか石路の花

泣くやうに枝垂るる冬の花火かな

千葉 内山タエ

漬物を主役の茶うけ小春縁

風呂吹や隠し包丁十文字

月食後くまなくはれし冬の月

臍の緒を出しては仕舞ひ年の暮

段畑や転がりやすき冬落暉

襟巻や狐は人を欺くと

横浜 熊切修

芦原やゆたかなる風棲みつきて

遅れじと降る坂道朴落葉

小流れのただよふ藻草小六月

冬木立凛と木霊の住むところ

昼月や木の間縫ひゆく三十三才

突堤へ波立ち上り冬鷗

横浜 占部美弥子

冬牡丹の芽吹き数多や時頼忌

梵鐘を撞きたき冬日時頼忌

禅寺の日溜り占むる冬牡丹

かばかりの輝き庭の実千両

霸氣出づる孫や林檎の丸齧り

散歩する夫に至福の小春かな

新宿 稲垣佳子

建具師の匏研ぎをり花八手

石路の花築地に古き魚塚

神苑の昼なほ暗く竜の玉

水滴の光る蹲枯葉舞ふ

靈廟の真昼のしじま銀杏散る

雲流れ銀杏落葉の嵩を生む

# 耕 土 集

## 松本三千夫選



宿坊や一期一会の冬座敷

小野 弘正

開発の看板かくす枯すすき

落葉踏んで日曜画家のつどひけり

冬紅葉浮かべしごとし竹生島

遊覧船便の減りたる冬の湖

肥田 俊昭

海暮れて白き波頭や冬銀河

立冬のアフリカ沖や波高し

忘年や女性ばかりのレストラン

汗血飛び寒さ忘るるボクシング

鮫鯨の吊し切りされ咳もなし

宮元 陽子

風誘ふ落葉の舞の並木道

天井の板の人面冬座敷

暗雲や玻璃戸を拭きて冬構

月冴ゆる関門橋や赤間宮

富士山の稜線微か雪凍てて

横浜 正谷 民夫

海鳥の群れて玄海冬さるる

軍港の軍艦色にしぐれけり

ブロンズの裸像に箱根しぐれかな

月山の闇を斥け冬銀河

松井 宮子

帯解きの女兒の足元スニーカー

神苑を灯点すごとく石露の花

冬薔薇凜と真紅の勢かな

日溜りの落葉だまりや猫だまり

予備校の必勝幟師走空

渡辺 絹代

山里の空をひろげて柿明かり

動くともなく雲動く木守柿

山芋の黄葉著し目の高さ

乾物屋のはだか電球年の暮

家ごとに小橋のかけり注連飾る